六本木の思い出（その三）

請川　雅春

昭和五十六年の新年度である四月が近づいてきていた。もうすぐ、ぼくの六本木での生活が一年となる。職場での顔馴染みが増え、毎日の仕事のルーチンにも慣れ、活動範囲が少しずつ拡大していった。

人間関係では、陸上幕僚監部での採用同期生である十二名の固い絆をベースに、所属する法務課の要員はもちろんのこと、担当業務である行政文書関係者、消耗品や備品関係者、給与関係者など、仕事で関係するネットワークは網の目のごとく拡張していった。

その中には数カ月前に大迷惑をかけた足立士長や石田士長もいたが、今では顔を合わせると簡単な挨拶を交わして世間話のできる間柄となっていた。彼女達とはぼくの採用同期の友人達と一緒に新宿の居酒屋で飲み会も重ねていた。その時の彼女達は勿論、外出許可証を持参していた。

しかし、足立士長は一年後に退職して一般企業への就職を決心しており、その準備のために簿記の専門学校に四月から通うことになっていた。また、石田士長は九月頃に実施される自衛官の幹部候補生試験の受験勉強を開始していた。課業後に彼女達を誘うことは当分控えなければならなかった。

そんなある日の夕方、法務関係の書類を内局の担当に届けた帰りで、駐屯地内の歩道を歩いていた時のことだった。車道を前方からゆっくり進んできたクルマが、ぼくのすぐ手前で停止した。そのクルマは黒のセダンで、官用車と違って、かなり高級なクルマに見えた。しかし、この檜町駐屯地には政治家や大企業の重役たちが頻繁に出入りしていたので高級車を見かけることは珍しいことではなかった。ぼくは、クルマの運転手を見ることもなく通り過ぎようとした。

すると、そのクルマの運転席から

「川田じゃないか。」

ぼくの名前を呼んだ運転手の顔を見て驚愕した。そして、何度も見返した。この駐屯地内にいるはずのない男だった。

声を出すことも忘れて相手の顔を見るばかりですぐには声を上げることができなかった。そして、漸く声を出すことができた。

「高ちゃん。どうしてここにいるんだ。」

高ちゃんとは高野という名字で、ぼくの故郷の友人である。小学校から高校まで同じ学校で、特に中学校では同じ軟式庭球部であったこともあり、かなり親しくしていた。しかし、大学生になってからはお互いの学校が北海道と関東で遠距離となったせいか、少し疎遠になっていた。

高ちゃんはぼくの質問には答えずに、

「川田は、ここで仕事しているのか。」

「そうだけど……。」

さらに、質問を繰り返そうとしたが、高ちゃんが遮った。

「ごめん。これから内局へ行って済ませなくてはならない用事があるんだ。」

高ちゃんは少し考えて、

「二時間後に、ここで待ち合わせないか。その時間なら、お互いに仕事が終わっているだろ

う。」
今日の残りの仕事を考えながら回答していた。
「大丈夫。ここで待っている。」
二時間後なら午後六時半で、いつもの退庁時間より少し早いが、ぼくの職場は飲み会とデートには理解がある。大丈夫。

ぼくの故郷は、関東ではないし、大学時代過ごした北海道でもない。関西に属する地方の小さな町であった。
高ちゃんと一緒に過ごした時間は長かったが、特に印象に残っているのは、三島由紀夫が割腹したその日のニュースをラジオで高ちゃんと一緒に聴いていたことである。
それは、ぼく達が中学校三年生の十一月末のことだった。高校受験を前にして、息苦しい毎日を送っていたせいか、ぼく達は放課後、気の合う友人と一緒に過ごす時間が唯一の息抜きとなっていた。
その日の夕方も、高ちゃんと一緒にぼくの部屋でラジオをかけっぱなしで、最近学校で起こった取るに足りない話や中学時代まで遡った話をしていた。
その時、当時のラジオでは珍しい臨時ニュースが流れた。ぼく達は話を止めて聞き入っていた。
ニュースでは、三島由紀夫が自衛隊の市ヶ谷駐屯地で亡くなったことのみを伝えるだけで、その詳細な説明はなかった。当日の昼過ぎに起こった事件のためと、あまりにも衝撃的な内容だったため、マスコミも事実関係を正確に掴んでいなかったものと思われる。
高ちゃんは三島由紀夫の小説が好きで、時々『金閣寺』の話をしていた。
「もう、三島の本が読めないのか。」
そう、小さく呟いた。
恥ずかしながら、ぼくはこの時三島作品を読んだことがなかった。読み始めたのは、もう少し先のこととなる。

そんなことを考えながら、その日に片づけなければならない仕事を確認し、今日、高校時代の友人と約束があるので定時退庁する旨を直属の上司に伝えて約束の場所へ向かった。
高ちゃんは、予定の時間より早く先ほど会った場所でクルマに乗って待っていた。クルマの窓ガラスを軽くノックすると、窓ガラスが下り、
「もう仕事は終わったかな。」
と聞かれたので、頷くと、
「じゃあ、乗って。クルマを議員会館の駐車場に戻さなければいけないけど、その後どこかで食事でも一緒にしようよ。」
そう言って助手席を手で示した。
ぼくは、官用車で正門を出入りすることはあっても一般の乗用車に乗っての出入りはなかったので、いったいどうすればいいのか迷っていたが、フロントガラスに『常時立入』と大きく書かれた防衛庁長官の職印が押された許可証が掲示されているのを見て、これがあれば出入り自由だと気が付いた。しかし、高ちゃんが何者なのかという疑問が更に大きくなっただけで、正門を出るまでは声をかける雰囲気ではないのが、もどかしかった。
正門では、銃を持った警衛の自衛官が敬礼で見送ってくれた。高ちゃんは、正門を左折して六本木交差点に向かって走り始めた時に、やっと喋り始めた。
「川田は防衛庁に入ったのか、知らなかった。制服着てないので自衛官じゃないよな。」
知らせなかったぼくを責める様子ではなかった。そして、ぼくの反応を確認しないで続け

た。
「それで、所属はどこなんだ。」
ぼくは、略称で答えても分かるかなと思いながらも、正式名称は長いし、更に分かりにくいと思い略称で答えた。
「陸幕の法務課で勤務しているんだ。」
「へえ、意外だな。大学での専攻は確か語学系だったはずなのに、法学部でもないのに防衛庁の法務課勤務とはどういうことなんだ。」
それは自分でも不思議に思っていたが、その理由が判明するには、まだまだ時間が必要であった。クルマは六本木交差点を左折していた。

昭和５０年代の六本木交差点

「実は今、代議士の秘書をやっているんだ。」
ぼくは、驚きと同時に、この高級車と『常時立入許可証』の意味を少し理解した。そして、高ちゃんの父親がかつては教育者であったこと、そして早期退職して市会議員から県会議員まで務めていたことなどを思い出していた。世襲という言葉を思い起こし、そういうことかと思ったが、父親の話題は控えた。
「うちの代議士は去年まで防衛庁長官を務めていたんだ。その関係で今も防衛庁内局の官僚と付き合いがあって、今日もその用事だったんだ。」
クルマは赤坂に向かっているようだったが、ぼくには都内の道路事情が全く分からなかった。
赤坂を抜けて国会議事堂が見えてきた。
「議員会館の駐車場にクルマを止めて、近くの店で食事でもしようか。」
ぼくに反対する理由はなかった。
案内された店舗は地味な門構えで、何の店か分からなかった。六本木のランチで行く店とは趣が大きく異なっていた。いや、六本木でも同様の店があったかも知れないが、気付かなかっただけだろう。
店に入ると、カウンター席のみの、十人も座れば満席の小さい店舗で『天ぷら』の専門店であった。まだ時間が早いのか誰も座っていなかった。
高ちゃんは、店主と軽く挨拶を交わしてから、ぼくを紹介した。
「こちらは川田君。小学校から高校まで一緒だったんです。」
ぼくは、軽く会釈をした。
高ちゃんは、ぼくの方に向き直って、
「何か飲もうか。グラスビールかな。」
「うん、ぼくもビール。」
そう言うと、高ちゃんはビールふたつを注文した。
「天ぷらの注文は、〈おまかせ〉にすると、様子を見ながら出してくれるし、もうよくなった時はストップをかければ止めてくれるから。」
彼の手際よさは、代議士秘書という職業柄なのか、生来のものなのか判別できない程、板に付いていた。
グラスビールを合わせて乾杯すると、高校時代のふたりに戻っていた。
「高ちゃん、久しぶりだね。連絡したいとは思

っていたんだけど、実家へ帰る機会がなかなかなくて、ここ一年は新入社員で気持ちの余裕もなかったし、連絡しなくてごめん。」
「こっちも同じだよ。まだ、新入りで分からないことだらけだし、クルマの運転だって、やっと少し慣れた程度よ。初めて運転した時は大変で、代議士を自宅に送り届けて議員会館に帰ろうとしても、道に迷ってグルグルと同じ道路を何周もして涙が出そうになったよ。」
　笑いながら話が続いた。
「一番困るのは、人の顔と名前が覚えられないことなんだ。一日に何十人もの人と会うので、全員覚えるのは無理。代議士や先輩の秘書は一度会った人でもよく覚えているんだ。つくづく、秘書としての適性がないことに気付いて厭になるよ。」
　高ちゃんは、カウンターテーブルに置いてある綺麗な柄のお皿に盛られ始めた天ぷらの中から野菜天を選んで、箸で挟んで口の中に放り込んだ。
　美味しそうに食べる様子を眺めてから、ぼくも同じように野菜天を箸で挟んだ。揚げたての天ぷらは美味しかった。六本木のランチで食べた天ぷら定食も美味しかったが、それ以上に美味で柔らかい食感と甘い香りが溢れていた。高ちゃんはすでにビールを飲み干してお代わりの注文をして、また語り始めた。
「それでも最近は少し名前が覚えられるようになったんだよ。それは、名前を憶える必殺技を思いついてね、まだ誰にも言ってないんだけど、貰った名刺の裏に、その人の顔と身体の特徴を簡単にメモするんだ。文字を書くことによって脳の記憶中枢を刺激して記憶力がアップするようなんだ。高校の時に英語の単語帳を作っただろう。表に英単語、裏に日本語を書くやつ。英語と日本語を結びつけて英単語を覚える手法、あれに似ている。」
　高ちゃんは、完全に高校時代にワープしていた。ぼくは、うんうんと頷きながら美味しい天ぷらとビールを交互に口の中に放り込んだ。高ちゃんは調子が上がったのか、議員会館の隣の部屋の代議士事務所の女性秘書の話を始めた。付き合っているわけではないようだが、お互いに意識しあっているらしい。多忙な代議士秘書の仕事をこなしながら逞しい男だと思った。
　羨ましい気持ちがいっぱいになって、ぼくは数カ月前から音信不通になっている銀行員の山崎玲子さんとの出会いから話し始めた。防衛庁の同期の誰にも、これほど詳細な話はできていない。しかし、幼馴染の高ちゃんには素直に話しをすることができた。
　高ちゃんは、「へえー」とか、「やる時はやるもんだね」とか合いの手を入れながらぼくの退屈な話を熱心に聞いてくれた。そして、最後に、
「それは、川田が悪い。」
　そうきっぱりと言い切った。そしてニヤリと笑いながら、
「でも、すごく川田らしい。」
　その言葉を聞いて、ぼくは喉の奥に刺さっていた魚の骨が取れたような、何かから救われた気持ちになっていた。
「そう言えば、最近オヤジの選挙区へ行った時のことなんだが、気になる話があったんだ。」
　そう言えば、高ちゃんはいつのまにか自分が仕える代議士のことを「オヤジ」と呼んでいた。
「川田は自衛隊の『隊友会』を知っているか。」
　ぼくは、その名称しか知らなかった。ただ、入庁した時に隣の係りの自衛官から
　「隊友会は自衛隊員みんなの相互扶助の組織なので是非入ってほしい。そして、入会すれば、これからの防衛庁生活の手助けになるよ。特に事務官は地連勤務が多いので役に立つよ」

そう説得された。『地連』とは、『地方連絡部』という組織で、各都道府県に設置されており、主に自衛隊員の募集と、期間限定で勤務する自衛隊員の再就職の世話をする組織である。

その時に、入会金と年会費を幾らか支払って入会したことを覚えている程度で、活動内容については、ほとんど知らなかった。

「知らない。」

高ちゃんの質問にそう回答すると、やっぱり知らないかという顔をして隊友会について語り始めた。

「隊友会とは、社団法人なんだけど自衛隊の外郭団体のようなものなんだ。でも、その実質的な活動は全国各県にある県隊友会が担っているんだ。オヤジの選挙区にも当然、その隊友会があって、防衛庁長官を務めたことでオヤジの選挙区事務所にも隊友会の関係者が頻繁に出入りするようになったんだ。」

隊友会に関しては高ちゃんの方が詳しいようだ。そりゃそうだ。地方の選挙区で隊友会の活動を間近に見ているのだから当然と言えば当然だ。

「オヤジの選挙区へ行った時のことなんだが……」

高ちゃんは話を戻した。

「隊友会が設立してからずっと継続して行っている事業のひとつに、その県出身の自衛官が公務で亡くなった場合には、各県にある護国神社に合祀するという慣習になっているらしいんだけど、最近、オヤジの選挙区で合祀した自衛官の遺族から勝手に合祀しないでくれと訴えられたらしい。遺族というより奥さんと言った方が正確のようだけど、その奥さんがクリスチャン、キリスト教の信者ということなんだ。国の機関である自衛隊が信教の自由を侵しているということで裁判所に提訴したということらしい。そこで、隊友会の人から、うちの事務所に、どう対応すればいいのか相談されて困っているんだ。」

本当に困っている様子だった。今日、防衛庁に来た理由も、隊友会の件だったようだ。

天ぷらの具材は、野菜類から魚介類に移ってきていた。サクサクした衣が心地よくて、ストップをかけることなく食べ続けていた。飲み物は、ビールから日本酒になっていた。

「川田、陸幕の法務課なら、護国神社合祀の関係で訴訟を受けたという情報が入っているんじゃないか。亡くなった人は、確か陸上自衛官だったはずだよ。」

ぼくも、高ちゃんから話を聞いてすぐに、うちの法務課が訴訟の対応をしている可能性があるとは思っていた。しかし、法務課の書庫に保存されている訴訟関係の資料は膨大で、高ちゃんがいう護国神社合祀に関する資料が何処に保存されているのかを担当外のぼくが見つけることは非常に難しかった。以前、「反戦自衛官訴訟」の関係資料を読むことができたが、それは、ぼくが公判を傍聴に行くよう命じた法務課長が、担当の法務自衛官に指示して、彼の手持ち資料をぼくに貸してくれたお蔭だった。

また、万が一にも資料が入手できたとしても、ぼく達には職務上知りえた秘密を漏洩してはならないという守秘義務が課せられている。「秘文書」に指定されていれば、持ち出しは不可能だし、もし部外者にその資料を提供したり、口外するだけでも、懲戒処分の対象になってしまう。

内局の職員に頼んでも守秘義務に関しては同様で、相手が政治家といえども外部の人間に資料を提供することは難しいと思う。しかし、政治家本人が直接出てくれれば何とかなるのかも知れない。

「高ちゃん、悪い。ぼくじゃ役に立てないかも知れない。」
ぼくは、正直にそういったが、高ちゃんは特に気にする素振りもなく話題をかえた。
オヤジは東大卒で優秀な官僚だったこと、勉強熱心で毎日夜遅くまで本を読んでいること、誰にでも優しく接する人格者であること、お金に執着しないクリーンな政治家であることなどを熱く語った。代議士に仕える秘書は、本人のことを相当リスペクトしないと勤まらない職業なのかも知れない。
高ちゃんと再会してまだ数時間しか経っていなかったが、ぼく達はすっかり高校時代のふたりに戻っていた。しかし、会話の内容は高校時代と違って社会人としての現実感があった。高ちゃんは、防衛庁で親しくしているキャリア官僚の名前を挙げて、今度紹介したいとの申し出もあったが、やんわりと断った。防衛庁でのぼくのネットワークは拡大中であったが、それは、ぼくが発信するべきものであって、政治家の威を借りたものであってはいけない気がしていた。
料理をストップしてからまだ少し飲んでいたが、
「また、近いうちに一緒に食事しようよ。」
高ちゃんは、そう言って店長に会計を頼んでいたが、お金と領収書の交換なく店を後にした。
「割り勘にしようよ」そう言うぼくを無視して高ちゃんは、また連絡するからと言って、ぼくに名刺を渡してくれた。

ぼくは、高ちゃんに会った後すぐに隊友会について調べた。とはいえ、ぼくはれっきとした隊友会員なので、勧誘してくれた隣の係りの塚本3陸佐に尋ねただけだったが、直ぐに隊友会の広報パンフレットを持ってきてくれた。
最初のページの、『会の目的』には「国民と自衛隊とのかけ橋として、相互の理解を深めるとともに、防衛意識の普及高揚に努め、国の防衛及び防災施策、慰霊顕彰事業並びに地域社会の健全な発展に貢献することにより、我が国の平和と安全に寄与し、併せて自衛隊退職者等の福祉を増進することを目的としています。」と記載されていた。気になったのは「慰霊顕彰事業」の部分だった。
更に読み進めると、『事業』の項のなかに、「殉職自衛隊員及び戦没者等の慰霊顕彰に関すること」と「殉職自衛隊員の遺族に対する援助」が記載されていた。このあたりが、殉職自衛官を護国神社に合祀した根拠かも知れない。
当該事案の訴訟関係資料が法務課に存在するかどうかは手掛かりが無く、まだ捜索していなかった。
採用同期のなかに、有名大学の法学部出身で司法試験の一次試験に合格している男がいることを思い出して、彼に、何か知らないかどうか聞いてみようかなと思っていた。
そんなある日、ぼくの机上の電話が鳴り、受話器を取ると交換手の声が聞こえた。外線からの電話だ。ふと、銀行員の玲子さんからの電話を思い出していたけれど、そうではなかった。交換手が困った声で、
「外線から電話が入っておりまして、その方が『陸上自衛官』とか、『訴訟の件』とか、『裁判所』と言われていますので、陸幕の法務課さんの案件と思いますので、お繋ぎしてよろしいですか。もし、担当外でしたら九番のダイヤルを回せば交換に戻りますので回してください。お繋ぎします。」
そう言うと、直ぐに回線が切り替わる音が聞こえた。
法務課には自衛隊内から広く法律相談を受

ける任務を持っており、時々、地方の自衛隊駐屯地から相談の電話が入るが、それは内線電話に限られ、外線電話から法律に関する問い合わせがくることはない。一般の人から自衛隊に関する問い合わせは、広報室で受けている。陸海空それぞれの幕僚監部に広報室があるし、内局にも広報室がある。

どこの広報室に回すべきか考えながら答えていた。

「はい、陸上幕僚監部法務課の川田と申します。」

しかし、直ぐには声が聞こえなかった。交換手から転送される間に切れたかなと思っていると、女性のか細いが透きとおった声が聞こえてきた。

「わたくしは、自衛隊が嫌いです。」

声は小さいが、はっきりとした口調で、彼女の意志の強さが感じられた。部外者から直接に「自衛隊が嫌い」と言われたことは初めてだったので、少なからずショックを受けた。

同期採用の広田という男が陸幕広報室に勤務しており、時々自衛隊を誹謗中傷する電話がかかってくるので困っていると言っていたのを思い出した。

電話の女性は言葉を続けた。

「自衛隊って毎日何をしているのですか。誰かに毎日厳しい訓練をしているって聞いたことがありますけど、その訓練で人が死んでいますよね。国や国民を守るための自衛隊が訓練で仲間を殺すって、おかしくないですか。」

なるほど、正しいことを言っているなと思ったが、そう考えさせられること自体が、相手の思うツボになると感じたので話を遮った。

「あの、申し訳ないのですがこちらは法務課なので、担当部署に回します。」

交換に電話を返して、陸幕の広報室に繋いでもらおうとしたところ、相手は慌てた様子で、話しを続けた。

「あなた達は、いつもそうやってたらい回しにして、ちゃんと答えてくれないじゃないですか。先程話した女性も、わたくしの話を聞いてくれているのかと思ったら、いきなり保留中の音楽になって、次にあなたが出てきて、またどこかに回すわけですか。防衛庁って所はいったいどうなっているのですか。」

困ったと思ったが、ぼくは、広報室の広田が、電話でのクレーマーの有効な対処法を語っていたのを思い出して、その手法を使ってみた。

「分かりました。電話では、なかなか伝わらないことがありますので、一度防衛庁まで来てお話しいただけませんでしょうか。」

広田の話では「電話でのクレーマーは気が小さくて面と向かっては言えない人種なので、防衛庁に来いと言えば絶対に来ないし、クレームの電話も収まるんだ。」そう豪語していた。

広田の言うとおり、相手の言葉が止まった。ぼくは、更に続けた。

「ぼくは、陸幕法務課の川田事務官と申します。防衛庁の正門に受付がありますので、そこでぼくの所属と名前をお伝えください。」

暫く応答がなかったので、広田から伝授されたクレーマー対策が功を奏したのかと思いながら、これ以上の沈黙があれば電話を切ろうかと思ったその時に応答があった。

「分かりました。」

あまりにも小さな声だったので聞き逃すところだったが、そこで電話は切れた。

防衛庁勤務を始めて最初の年度末を迎えていたが、当該年度の業務の総まとめと新年度を迎える準備の両方の仕事が重なり、想像以上に多忙な毎日を送っていた。

春がそこまで来ていたが、その日は北風が強く、真冬に戻った寒さだった。
電話が鳴り、いつものように所属と名前を伝えると、珍しく正門の受付からの電話であった。
「正門の受付ですが、あなたが川田事務官ですか。」
はいと答えると、
「今、白石由紀さんという方が面会に来ています。お迎えに来ていただいた方がいいと思いますが、いかがいたしますか。」
知らない名前だったが、予定された来訪者ならば、「通してください。」と言うだけで済む話だった。「迎えに来ていただいた方がいい」と言われたのは初めてだった。そこで、ぼくはとりあえず正門に向かった。今日は登庁時から変わらず外は寒かった。
受付の事務室に入って所属と名前を伝えると、白石さんには隣の面会室で待ってもらっていますとのことであった。ぼくに迎えに来いとか、来訪者を面会室に通すとか、いやに丁重な対応を不思議に思いながら面会室のドアを開けた。面会室はそれほど広くなく、小ぶりで長方形の会議室用テーブルがひとつあり、パイプ椅子が四脚、並べられていた。そのパイプ椅子のひとつに、クリーム色をした長めのウールのコートを羽織った髪の長い女性が腰かけていた。そして、ぼくの方に首を傾げる素振りをした。薄い色のサングラスをかけているのでその表情が読み取れなかったが、そのサングラスと右手に持った白い杖から考えて目の不自由な人に違いないと思った。いや、ドアを開けたぼくを直視しないで音に反応した様子からみて、ほとんど目が見えていない様子だった。
本人を目の前にしても誰なのかさっぱり分からなかった。
「陸幕法務課の川田と申します。」
そう、声をかけるしかなかった。
「わたくしは、先日電話でお話しさせていただいた白石です。」
ぼくは、あっと声を上げそうになった。「防衛庁に来いと言えば絶対に来ない」はずではなかったのか。しかも、目が見えないのにどうしてここまで来られるのか。
「お察しのとおり、わたくしは目が見えません。でも、その分、耳が良くて声を聴くだけで相手の人となりが、ある程度分かるのです。川田さんは自衛隊だけど、わたくしの話に耳を傾けてくれるような気がしました。」
いや、違う。ぼくはいいかげんな対応しかしていない。
「でも、今日は勇気を出して来てよかったの。地下鉄の人達も親切にエスコートしてくれたし、防衛庁への行き方も丁寧に教えてくれました。」
バカな。目が見えないのにひとりで地下鉄に乗って六本木まで来るなんて無鉄砲すぎる。最近は、地下鉄のホームで目の不自由な人が事故に遭うニュースが後を絶たない。それに、今日は風が強くて寒い。こんな日にどうして来なければならないのか。
ぼくは、大変なことをしてしまった後悔の念でいっぱいになった。せめて、ぼくがこの人の自衛隊に対する誤解を解かなければならない。説明を尽くさなければならないと思った。
「この前の電話では、詳しい話ができませんでしたが、わたくしによくしてくれていた方の旦那様、自衛隊の人なのですが、その方が訓練で亡くなってしまって、奥様は悲しくて病気になって臥せってしまったのです。それなのに、自衛隊が勝手に旦那様を神社に連れて行ってしまって。わたくし達は教会の知り合いなのです。」

〈自衛官の妻〉、〈神社〉、〈教会〉、これらのキーワードは、もしかしたら高ちゃんから聞いた訴訟事案のことかも知れない。

「その神社は、護国神社のことではありませんか。」

「そうです。護国神社に旦那様を連れて行ったのです。どうか、奥様に返してあげてください。」

ぼくは、頭が真っ白になっていた。何をどうすればいいのか。いや、ぼくには何もできない。彼女は、まだ言葉を続けた。

「奥様は裁判所に訴えましたが、本当はそんな乱暴なことをする方ではないのです。自衛隊が神社に持っていった旦那様を返してくれさえすればいいのです。教会の皆さん怒っています。」

ぼくは、広報室の広田の「絶対に来ない」と言った言葉の続きを思い出していた。「しかし、万が一、クレーマーが直接来庁して来た時は、ふたり以上で対応すること。ひとりで会ってはダメだ。」

もう遅い。ぼくの対応は最初から最後まで間違いだらけだ。今、ぼくが彼女に対してできることは、無事に自宅まで送り届けることだけかも知れない。そして、彼女の長い髪に隠れた耳に向かって謝罪した。

「ごめんなさい。ぼくでは何のお役にも立てません。」

そして、懇願した。

「今日はあなたを自宅まで送り届けさせてください。」

それくらいしか、今ぼくにできることは無かった。

窓から見える樹木が大きく左右に揺れていた。風の強さが増しているみたいだ。春一番にはまだ早い、冷たい風が吹き荒れていた。